

本の中のサツマイモ (5)

<江戸のサツマイモ有毒説>

元 川越サツマイモ資料館長 いのうえ ひろし
井上 浩

* はじめに

2019（令和元）年7月10日の朝日新聞、医療頁に「たん」についての記事が出た。大見出しが「たんのサイン見逃さない ―

日本呼吸器学会が診療指針で」とあり、解説がこうあった。

「ねばねばしてのどに絡^{から}みつくとたんは、口から肺へ空気の通り道（気道）の異変を知らせるサインだ」「身近だが注目されないことも多い」「数日程度なら風邪などが多いが、3週間～1ヶ月ほどせきやたんが続くときは早めに医療機関を受診した方がいいという」

それで、調べてみたくなったのがサツマイモとの関わりがある、江戸の「痰^{たん}の毒説」である。

* 『有徳院殿御実紀付録巻十七』（新訂増補国史大系第四十六巻）

有徳院とは八代将軍、徳川吉宗への「おくり名」である。その将軍の新農産物奨励策でよく知られているのは、砂糖きびとサツマイモである。幕府の公式記録である上掲書の甘藷関係記事の要点はこうなっている。

「沙糖に次では甘藷をもつくらし給はむとて。あつく沙汰^{さた}し給へり。これは享保十七年西国蝗災ありて農民飢饉せしとき。

深見新兵衛有隣に。長崎の辺凶荒のさまなども尋ねとはせられしに。新兵衛答申けるのは。某^{それがし}が父新右衛門貞恒長崎にすまいけるが。かの地はもと。米三千石ばかりいだす地にして。市中になりはひするものは。五百戸にこえたれば。土地の米をば。十日あまりにして食尽すべし。

諸国運漕の米とだゆる時は。たちまち飢に及ぶべきことなりとて。甘藷を植て食料とする事を教けれど。農民のならひ手なれざるわざをいとひ。其頃はさのみ植えもせざりしかど。享保六年彼地にいたりてみれば。はや次第に植えまして食用ともなせり。さればこたびの凶荒にもおほくのたすけとなり侍るべし。

これより先薩州にてはとくこれをつくり。農民日用の食となし侍れば。かしこに行きかふ舟人等かひもとめて。江戸^{たん}に來りうりかふ事となりしに。いつしか痰^{たん}の毒なりといひ出せしものありて人々これをきらひしかば。ふたたびうる者もなくなりになり。されど毒ありといふはひが事にてかへりて補益多く。薩州にては味噌にもつくり。また水にてさらし葛にもかへ用ひ。海辺などの五穀を生ぜざる地にもおほくつくり。よく繁茂するものなりとて培法など書て奉れり」（国史大系刊行会、昭和9年。316～7頁）。

この文書から次のようなことがわかる。享保の大飢饉は享保17年に起こったが、それより11年前の長崎では、すでにサツマイモづくりが盛んになっていた。

江戸には早くからサツマイモを積んだ船が来ていて、その売買もおこなわれていた。だが、それは痰の毒とする俗説が流れたため、嫌われる物になってしまっていた。それが間違いであったことは、薩摩の国でのサツマイモのさまざまな利用法からもわかる。

* 徐光啓編著『農政全書』

どこの国でも新来の農作物については、それが体に良いものであるか、どうかはまず問題になるはずである。中国南部経由で沖縄本島にサツマイモが入ったのは1605年であった。中国の明末^{みん}の学者で、政治家であった徐光啓は『農政全書』（1639年刊）の中で、中国へのサツマイモ伝来期の民情を考慮し、サツマイモには13ものすばらしい利点があるとした。「甘藷十三勝」がそれで、その第一は「畝に植えて数十石出来る」となっている。そして第三に「人の薬になる事、薯蕷^{しよゐ}（やまのいも）と功能同じ」としている。

中国でもサツマイモが安全な食べ物であるか、どうかは、責任のある地位の人の保証が必要であった。青木昆陽が『蕃藷考』を書くとき、全面的に頼ったのは、そのことが記された「十三勝」であった。

* 宮本常一著『甘藷の歴史』（未来社、1962年）

江戸の痰の毒説は幕府の公式記録にあるほどの重大事であった。だから上掲書にそ

の解説がこうある。

「享保の飢饉対策のひとつとして幕府も甘藷の普及問題を取りあげてくる。そのまえ、薩摩から江戸へ入港する船がよく甘藷を積んできた。表向きは国禁ということになっていたが、船で持ち出される分—下層社会にあっては国禁もなにもあったわけではなく、もっと自由な往来があった。

だから、もう享保以前に江戸へは甘藷がもたらされていた。だが、江戸の町では、これを食べると痰の毒になるといってわすれかけられていた」（129頁）。

江戸っ子は享保の大飢饉前からサツマイモを知っていて、一時は買って食べていた人たちもいたことがわかる。

* 桑田忠親著『エッセイ集 黄色い鶏』（旺文社文庫、1982年）

著者は歴史家で太平洋戦争末期、東京から東上線の志木駅近くの農村に疎開した。それで近所の南永井村（埼玉県所沢市）の世襲名主、吉田家にあった川越いもの作り初め関係の古文書を見せてもらうことができた。そのいきさつが上掲書のエッセイの中のひとつ「川越街道」にある。

そのついでに、江戸には一時、サツマイモ有毒説があったと、こうある。

「薩摩芋は痰の毒だという俗説が、むかしからひろまっていた。青木昆陽はその俗説をしりぞけ、下総や上総にまで、これを移植させ、凶作の年の飢饉に備えさせた」（112頁）。

* 筑波常治著『科学事始』（筑摩書房、1963年）

江戸の痰の毒説は根の深いものであっ

た。そのわけをよく調べられた上掲書ではこうなっている。

「じつのところ『蕃薯考』は、内容的にすぐれた著作とはいえない。大部分は中国農書の引き写しにすぎず、昆陽自身の見聞はほとんどない。だが、そのテーマが、大岡越前守の関心をとらえた。というのは、越前守の庇護者である八代将軍の吉宗が、すでにサツマイモを知り、興味をしめしていたからである。

吉宗は九州の者から、サツマイモの効用を聞き、それを東日本に普及したいと考えていた。越前守はもちろん、吉宗の同志である。

ところが、儒学者の新井白石が、サツマイモは有毒だという風聞などをたてに、植物学者の岡島 仲 島^{おかじまちゅうとう}を味方にして、吉宗に反対していた。両者のあいだで、この論争がつづいているさなかに、『蕃薯考』が提出されたのである。しかも内容は、吉宗と越前守の意によくかなっていた」(65～66頁)。

* おわりに

関東は西日本の温暖なところとは違い、冬が長いだけでなく、寒気もきびしい。そのようなところで寒さに弱いサツマイモをつくるためには、その苗を畑に挿す適期に間に合うように苗をつくれる特別の苗床とその管理方法を開発しなければならなかった。

その関東は幕府の膝元であったから、「天領」ともいわれていた直轄地が多く、そこを代官たちが管理していた。その代官の中には、サツマイモが救荒作物としてもっとも優れたものであることを知っていて、享保の大飢饉前から管轄下の村びとにその試作をさせていた人もいた。村の名主クラスにその種いもを配って試作させ、結果の報告もさせていた。

わたしが住んでいる埼玉県内ではその2例が知られている。さいたま市大門宿と飯能市小瀬戸村のものがそれであるが、両者ともうまくいかなかった。なぜか？サトイモの種いもを畑に埋めるころ、サツマイモの種いもも同様に畑の土の中に直接、埋めさせていたからである。

青木昆陽が江戸でサツマイモの試作をしたときの、苗のつくり方はそれとは違うものであった。まず適温を保てそうな苗床をつくり、そのなかに種いもを埋めている。その土は馬糞などと混ぜ合わされていた。

それはそれとしてサツマイモ有毒説を真っ向から否定している『蕃薯考』ほど、ときの将軍や江戸の人たちをよろこばせたものはあるまい。

しかもそれを書いた昆陽は、それまでだれがやっても、うまくいっていなかった関東でのサツマイモ作りも、やりかたによってはつくれることを実証してみせてくれた。だから昆陽は江戸で「甘藷先生」といわれるようになった。